

越山若水

2021.7.18

明治末期発行の「県産業概要」

で、福井県が果実の増産による対岸貿易に意欲をみせる。敦賀港からロシア・ウラジオストク港向けにミカン、リンゴの輸出が増えて

いるが他府県産が多く、本県も増殖し輸出を期したいと著す▼敦賀港は1902年、ウラジオストクとの間に定期船が就航すると、対岸貿易港の拠点となる。寒冷地のウラジオストクでは野菜や果実の需要が高く、全国から産品が集まる。日露戦争後からシベリア出兵のころにかけてミカン、リンゴが輸出品の主要产品だった▼リンゴといえば福井藩主だった松平春嶽が幕末、米国から苗を輸入して「リンゴの父」と称された。孫の康荘は福井城跡に松平試農場を創設して、果樹園でリンゴ栽培に力を入れる。県文書館が開いている企画展に詳しい▼明治後期にはリンゴが果樹園の半分近くを占めた。だが21年には一転、病虫害により全滅。県文書館所蔵の果実収穫簿で分かった。この年、試農場は旧細呂木村山室(現あわら市)に移転。リンゴは細々と栽培されて、戦後の昭和天皇の行幸の際に献上される。56年に閉場したが、試農場とリンゴ栽培の歴史は記憶にとどめたい(「越前松平試農場史」)▼康荘は英国での留学を通し農業が最も国体に関するところ大なるを識ったという。その上でこう記した。「國豊の工夫は農事に在り」。康荘の高い志を知った。